

東京学芸大学の学生さんと「世代間交流」を目的として「かわせみカフェ」を開催します。企画・運営は幸学習館運営協議会。防災をテーマにマイタイムライン(防災行動計画)を作るワークショップを行います。工作コーナーではペットボトルでランタンを作り、昔遊びコーナーではけん玉やコマで遊びます。なお、感染症対策を行って開催します。会場内での飲食はできませんので、ご了承ください。直接会場へ



昨年度の「かわせみカフェ」の様子

幸学習館 ☎(534) 3076

## 市立小・中学校の全児童・生徒に電子図書館利用カードを配布



立川市図書館は、9月14日(火)から、国の「GIGAスクール構想」に基づいて市から貸与されたタブレットPCを使い、市立小・中学校の全児童・生徒が、市図書館の「たちかわ電子図書館」の電子書籍を活用する取組を始めています。

そこで、さらなる利用促進のため1人3点まで14日間借りられる「学校用たちかわ電子図書館利用カード」を作成し、全児童・生徒に配布しました。

各学校では、IDやパスワードの登録のほか、電子書籍の借り方や利用の仕方を指導しています。

「たちかわ電子図書館」の蔵書点数は約5千点、うち児童書は3千点ほどで、学校での読書活動や家庭での読書機会の確保を目的に、ライトノベル、絵本、絵どうわといった読みもののほか、図鑑やドリル、参考書といった学習支援に役立つ本などをそろえています。市図書館では、「読書を楽しむと同時に、学ぶ意欲につなげたい」と普及に期待しています。

また、授業の中でも、一部の学校においてタブレットPCを使用した朝読書や、黒板横の大型モニターに図鑑を拡大表示するなどして活用しています。

### 朝読書の風景



立川第三中学校3年生の教室

### 利用カードの登録風景



若葉台小学校5年生の教室

このような市立小・中学校全校での図書館の電子書籍の活用に向けた取組は、全国でも数例、東京都では初めてとなります。

中央図書館児童青少年サービス係 ☎(528) 6800

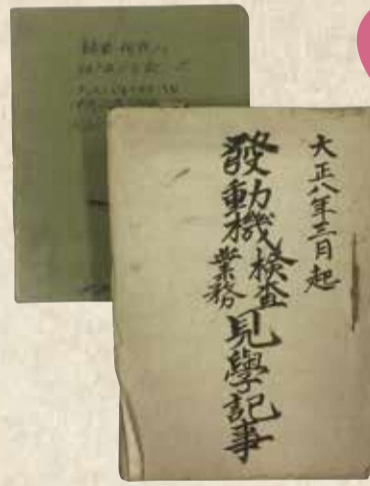
#### カード表面



#### カード裏面



## 飛行機への夢——立川飛行場と技師の記録——



留学技術者の業務見学記録と帰航時の日記(大正8年)

スタジオリブリ制作の長編アニメーション映画作品『風立ちぬ』(宮崎駿監督、平成25(2013)年公開)をご覧になったことはあるでしょうか。本作では、小説家・堀辰雄の同名小説と航空技術者・堀越二郎の半生を主な題材に、関東大震災から第二次世界大戦へ向かう激動の時代のなか、若き技術者・堀越が飛行機造りに情熱を注ぐ、ひたむきな姿が描かれています。作品の中盤、大学を卒業した堀越は飛行機開発を行う企業へ就職し、最先端の技術を学ぶためにドイツへ派遣されます。第一次世界大戦後、飛行機の有用性が広まり需要が高まると、欧米を中心に航空技術の研究・開発競争が繰り広げられました。しかし、飛行機開発の後進国であった日本は、ヨーロッパ各国へ技術者を派遣することで最新の情報を得ていました。立川にもこのような技術者が集まり、飛行機の研究開発が行われた時代がありました。大正10(1921)年に立川飛行場の建設が決定し、翌年に完成した飛行場に陸軍飛行第五大隊が岐阜県各務ヶ原より移駐したことで、立川には陸軍関係のほか民間の飛行機製造の企業や航空会社も集まりました。その関係者が各地から転入し、急増した人口により大正12(1923)年には町制が、昭和15(1940)年には市制が施行されるほど、立川の街は急速に発展を遂げます。

当館が所蔵する資料のなかにも、飛行機開発技術者旧蔵の資料があります。大正8(1919)年に陸軍航空部所属の「職工」としてイタリアを中心に、フランス、イギリスを視察した技術者の史

料によれば、イタリアでは「飛行学校二於ケル一般実習」、フランスでは「発動機検査業務見学」を行っていたことが分かります(発動機は飛行機のプロペラエンジンを指します)。検査業務報告書のなかでは、フランスと日本の検査形式を比較して「日本ニ於テモ検査ノ方法ヲ定メテ検査ヲ厳密ニ遣ルト云フ必要ガアルト思ヒマス、之ニ対シテ仏国テ最良ト信セラレ居ル方法ヲ御伝ヘ致ス積リデアリマス」と記されており、技術先進国から貪欲に学び取るうとする姿勢が読み取れます。

この技術者が所属した陸軍航空部は大正8年に所沢飛行場に設立された陸軍の下部組織で、航空関連の調査・研究や教育、器材の製造・修理などを掌りました。大正14(1925)年には陸軍航空本部と名称を変え、昭和3年には技術部が、昭和8(1933)年には補給部所沢支部が立川へ移転します(昭和10(1935)年に技術部は陸軍航空技術研究所に、補給部立川支部は立川陸軍航空支隊にそれぞれ昇格、独立します)。また、昭和15年には陸軍航空本部の飛行機製造工場として陸軍航空工廠が発足するなど、立川飛行場周辺には航空関係の技術者が多く集まっていました。

現在、立川飛行場があった跡地は国営昭和記念公園などになっており、JR西立川駅東側にある踏切の名称「航空支庁前踏切」「航空支庁西門踏切」が、かつてそこに飛行機開発の最前線があったことをひそかに今に伝えています。

歴史民俗資料館では、12月12日(日)まで、これらの資料を展示した企画展「立川飛行場と陸軍航空本部——ある技師の記録——」を開催中です。近年、立川飛行場や基地跡地の開発が着々と進んでいます。立川飛行場の建設が決まって今年で100年となるこの機会に、「空の都」立川の街で飛行機開発の一線にいた技術者の資料などをもとに、立川飛行場の歴史を振り返ります。技術者たちが飛行機開発という夢を抱いて集った往時の立川飛行場に思いを馳せてみませんか。

歴史民俗資料館(生涯学習推進センター)文化財係 ☎(525) 0860